

令和5年度社会福祉法人尾道さつき会尾道福祉専門学校
学校関係者評価委員会 会議録

日時：令和5年10月27日(金)11:00～12:00
場所：尾道福祉専門学校 203.4 教室

株式会社リクルート	ビジネスプロデューサー	加藤 茂博	
社会福祉法人蓬愛会 栃木介護福祉士専門学校	教務課長	武藤 清子	欠席
尾道市福祉保健部 高齢者福祉課	課長	柏原 美由紀	
全国老人福祉施設協議会	顧問	平石 朗	
尾道福祉専門学校	校長	邑岡 志保	
尾道福祉専門学校	教務主任	金子 清美	
尾道福祉専門学校	専任教員	重岡 秀和	オブザーバー
尾道福祉専門学校	専任教員	河田 信子	オブザーバー

1. 開会 校長挨拶

本校は改革が必要な状況と考えている。学生が自主的に学び成長できる環境を作り、また持続可能な経営面においても新たな取り組みを加えていきたいと考えている。その目的を果たす為に、この委員会にて皆様から多面的なご指摘をいただき、自分達の実践に繋げていきたい。

2. 報告事項

(1) 学校の現況、基本方針、教育活動等の現状と課題

2022（令和4）年度学校自己評価報告書・今年度事業計画半期状況報告から

1. 教育方針、学校運営

中期目標（2026年度到達目標）

○定員充足率 85%確保（68名/80名 1学年 34名）

○「体験から学ぶ学校」「学生が法人職員と対話ができる学校」

2. 教育活動

介護実習においては、新型コロナウイルス感染症拡大のため実習延期や受入取り消しがあったが実習が修了できるよう整えた。1年生は、認知症サポーター養成講座とおのみち見守り訓練を授業で行い、尾道市社会福祉協議会、キャラバンメイト、尾道市地域包括支援センターなどの職員に講師となっただき、実践的な学びの機会を得たほか、動画制作会社による SNS 運用についての授業や花王による身だしなみ講座など、異業種の方との接点をもって活動を行った。

3. 学修成果

就職希望者は、全員福祉施設に就職している。国試受験 28 名全員が合格した。令和 4 年度の退学者の中で、コミュニケーションの困難さなどがあり、施設でボランティア経験を積みながら今後の進路を検討していたが、行政や関連機関と連携をとり休学を経ての退学となった。個別の関わりをして学修しやすいように対応していった。

4. 学生支援

進路・就職に関する支援としては、2 年次に進路指導の時間を設け、履歴書の書き方や模擬面接指導を行うほか、福祉の職場就職説明会を 2 回開催することで就労意欲向上や就職先選考についての助言指導の充実につながっている。経済的な支援としては、広島県修学資金貸付や日本学生支援機構、また民間保険会社の奨学金に加え、本校独自の施設奨学金制度を設けている。これらの制度を活用しながらアルバイトをする学生も多く、学業に影響しないよう生活の見守りが必要である。

5. 教育環境

新型コロナウイルスによる感染予防のためのオンライン授業の環境整備を進め、有線設備を確保し安定的な授業運営を実現した。これにより、介護福祉士養成施設協会学会や尾道市地域包括ケア連絡協議会研修・シンポジウムに学生もオンライン参加し、福祉や介護の現場の最前線の情報に触れ、専門職との意見交換を行うことが出来た。

施設整備については、介護実習室の拡張のため古い備え付け実習用トイレや台所等の設備を廃止したことで、広く動きやすい環境を整えた。

6. 学生の受入れ募集

総合技術高校保護者の見学会を実施した。入学してからの魅力が伝わるように、保護者には、奨学金等の金銭面での情報が分かりやすく伝わるように工夫した。学校パンフレットは、学校カリキュラム・学生生活・サークル活動等、教員間で見直し、わかりやすく読みやすい内容に変更している。さらに本校独自の魅力ある情報・奨学制度等、詳細を掲載した内容についてもパンフレット及びホームページ等でも周知に努めている。また、教育成果として就職率 100% であることもパンフレットで伝えている。学校パンフレットを活用し、校内ガイダンス等に積極的に出向き、学校の魅力を伝えていく取り組みを行っている。オープンキャンパス等で来校する学生数の増加を図るよう努めている。

7. 財務

2022年度の入学者数38名（2名の休学者を含めると1年生は40名である。）財務状況は上向きとなった。一方で、年度途中の退学者もあり、財務状況は今後も楽観できない。介護職のイメージアップを図りながら、現役高校生の入学者を獲得するための努力がさらに必要である。

8. 法令等の遵守

専修学校設置基準等を遵守し、適正に運営するよう努めている。

9. 社会貢献・地域貢献

広島県地域医療介護総合確保事業における「介護施設等におけるICT定着促進事業」のうち「ICT・介護ロボット導入支援研修」の補助金を受けて、広島県介護福祉士養成施設協会が実施した、オンライン研修・シンポジウムとICT・介護ロボット体験相談会を県西部の介護福祉士養成校と本校で同時開催を行った。

昨年に続き、新型コロナウイルスによる感染予防のため地域とのつながりが減少した状況であった。学生のボランティア活動の支援としては、山手地区にある一人暮らし高齢者宅を訪問しての資源ごみ回収は継続し、地域の特性やそこに暮らされている方々の生活を支える一助になるように努めた。

（2）質疑応答・意見交換

平石様）聞くところによると、今はイベントをしても人が来ない。介護を目指す人が少ない。少子化が進み、コロナ禍から今までの発想では難しいのではないかと思われる。

加藤様）全産業の中で介護分野の伸びが遅滞している。働く人を支える意味のある介護分野の状況は全体に影響がある。改めて作り直していかなければならない。

平石様）業界全体を作り直すというが、まとまりが欠けている部分がある。専門学校に入学生として外国人を入れていくことをコンスタントにしていきたい。また、新しい機能を付与したい。各施設の外国人を指導育成する部分を担いたい。介護現場の質を保つため、施設に出向く指導者として派遣することも考えられる。以上のようなことを行政へ提案要請している。

加藤様）学校という形が今後も同様でよいのか。学生、社会人、外国人、未経験者が、いつでも効率的に教育が受けられることが求められる。今までと同じやり方は、変える方向で、一人前の介護者にできるかどうか、一年に1回しか学習の機会がないなどのプレッシャーがなくいつでも何回でもできて、一人も取り残さずにできる方向性があると思われる。学校では、授業について、友達との関係作り、外国人に対しては日本語の習得について、対応できるように考えていくことが必要と思われる。学生が主役であり、フレキシブルに足りないところを足していければ、退学者が減ってくると思う。

平石様）コロナ禍にあり、学校は集まるところから、オンライン授業を取り入れた。時代に合わせて変化していくことが必要である。

加藤様）教育の形を変えていくことが今後求められる。

平石様）介護福祉士会もだが、教える専門は学校の教員であり、学校の活用を進めたい。

加藤様) ICTの推進でいえば、現場で使わないのに、例えば紙での記録は、現場では使っていないのに実習で使うのはおかしい。

平石様) 行政と地域の活性化、医療も含む高齢化で、現場をよく知って新たな学校の形を模索する。

重岡) 実習での介護記録は、なければ楽しい。一日の体験のまとめとしても、現場で紙を使っているところがないとすれば介護実習でも紙から別の方法に移行したい。

校長) 目の前のことから変わろうとすることが必要である。

河田) ICTなど時代とともに変わることが求められる。その中、学生はどのような学生かと言うと、声が出せない、登校しにくい、友達作りができないなど困難さをもつ学生もいる。その学生に合った教育方法を合理的配慮をして方法論を支えていくことが必要だと考える。型にはめずに一人ひとりを教育していきたい。

校長) いろいろな学生がいる中で取りこぼさない学校を目指していきたい。

柏原様) 学生に対する個別的な配慮する教育の力量がいる。介護福祉士になりたいという意思の有無、小中学校等での体験で人にやさしくしたいと思う学生、学力の定着がない学生、集団になじめない学生、いろいろな学生がいることが想像されるが一人ひとりをケアしつつなおかつモチベーションを高めて、学力を身につけさせていくことがいる。介護の職場での対応力も付ける必要がある。そこの力をつけないとやっていけない。介護職としてやっていける教育が必要であることと理解する。

介護施設に出向いての教育は求められている。特に中小の事業所においては教育力の程度と離職の関連が考えられる。ICTの普及はまだできていない。ICTを取り入れ、人材確保につながるフロー図が描けない。ICTの取入れを専門学校でやれるとよい。

加藤様) 調査によると介護に入職する性格タイプでは、人との関係性を大切にする、慎重であり、繊細、心配性であり、集団でのアピールが難しい傾向がある。就職相談などキャリアカウンセリングで介護分野に紹介した人から、売り上げの目標はないし、笑顔にするだけで給料がもらえることに驚かれたということがある。専門性の部分を担う人と補助ならできるといって、少しでも気持ちがある人が仕事ができるようにするとよい。ICTについて先生は勉強をしなければいけないが、先生が一番知っているというのはあきらめて、生徒に教えさせるとよい。みんなで学習をしていくというのでどうか。

友達を作るためには、食事の場を共にすることが大切である。食事の提供やコーヒールームにして人が集まる場を作り、趣味や楽しいことをやりながら、友達を作りやすくなる。そのことも学校としては大切である。

3. 閉会

校長挨拶

若い学生との自由な話し合いの機会をもっと作っていきたい。考えていることや対話をする中で、共通認識を持つことで、学生生活を有意義なものとなると思われる。本校が社会資源として、尾道市の中で活用が図られることを期待する。行政と学校との体系化した関わりが現場支援につながると思われる。